

## 1. 公開セミナー「暮らしとお金の基礎を学びましょう」が開催されました

さる11月8日(水)～29日(水)10:00～12:00、研究交流棟5階にて、公開セミナー「暮らしとお金の基礎を学びましょう」を実施しました。本セミナーは、野村證券が社会貢献(フィランソロピー)事業として2003年より本格的に開始した事業で、本年度は野村證券の熱心な働きかけにより生涯学習教育研究センターの主催事業として実現したセミナーです。



回	テ マ	講 師
1	日本の経済と金融	藤井宏史(香川大学)
	お金の上手な活かし方	原田伸之(野村證券)
2	暮らしとお金	東原好之(野村證券)
3	金融商品の基礎	瓦林真一(野村證券)
4	マネー新時代の資産管理	東原好之(野村證券)

本セミナーは上記の通り、野村證券の社会貢献事業として行われたこともあり、経費についてはパンフレット作成費と資料代だけの負担で済みました。公開講座とは異なる本セミナーは、受講料が無料であったことに加えて、景気の回復と将来のための資産運用への関心の高まりから受講申し込みも定員50名をほぼ満し、盛況のうちに講座を終了することができました。

さて、一方で本セミナーの開催にあたりましては、いくつかの課題をクリアしなければなりません。投資をうながすような金融学習が大学が主催するセミナーとして相応しいのか、数ある金融機関の中で特定の証券会社との連携に問題はないのか、というものが最大の課題でした。これらを解決するために、野村證券との連携講座を先行して行っている他大学より成果と課題を聞き取りしたり、生涯学習関連の雑誌記事からその趣旨や事業実践について調査しました。また、主催セミナーを外部委託するような形態は今後の本センターの位置づけにも関わるため、慎重に協議しました。紙幅の関係で詳細を述べることはできませんが、このような協議を経て、実施にいたりしました。

初回の様子を紹介しますと、阿部文雄センター長による挨拶があり、藤井宏史教授(経済学部)から「日本の経済と金融」をテーマに現在までの金融市場の動向を実にわかりやすく熱心にご講義いただきました。続いて、原田伸之氏(野村證券)よりお金のまつわる身近なトピックをユーモアも交えながら、お話しいただきました。宝くじの確率について触れたかと思えば、人間の心理に深く迫り、問いかけ方はクイズ番組の司会者ばりで、あっという間の1時間が過ぎました。参加者も熱心な方々ばかりで、メモをとりながら学んでいました。

アンケートでも好評を得ましたので、次年度以降のセミナーの内容を発展的に組み替えて、継続実施したいと考えています。(文責:清國祐二)



## 2. 社会人学生の中から見た香川大学 ～かがわ県民カレッジ研究・実践講座受講生アンケートより～

### (1) 調査の概要

一昨年度のニューズレター（No.1 Vo.3）でご紹介しましたとおり、平成16年3月に香川県教育委員会と香川大学との間で結ばれた協定により、かがわ県民カレッジの一環として、一部の学部専門科目において地域住民の方々（カレッジ生）が本学学生に交じって授業を受けられています。彼らの実態や意見・感想を知ること、香川大学を地域の生涯学習施設としてより一層活用させる方策を探るため、本年1月30日～2月13日、平成16・17年度の修了生（見込含む）計53名にアンケートを郵送し、42名から回答を得ました（回収率79.2%）。以下、抜粋してご報告いたします。今後のご参考として頂ければ幸いです。

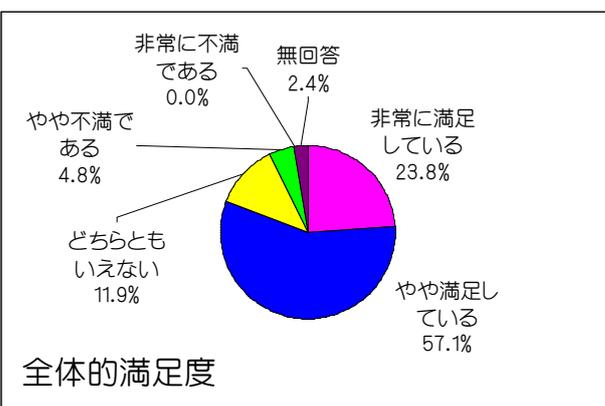
### (2) カレッジ生の実態

①**属性** 性別では女性が圧倒的に多く（85.7%）、年代では50代以上が4分の3を（76.2%）、60代以上が半数弱を（47.6%）占めています。最終学歴では高校（旧制中学等を含む）および短大・高専が拮抗しており（それぞれ35.7%、33.3%）、大学はやや少なめ（23.8%）です。

最終学歴	人数	%
高校(旧制中学等を含む)	15	35.7
短大・高専	14	33.3
大学	10	23.8
その他	3	7.1
合計	42	100.0

②**教員の熱意** 教員の教育に対する熱意については、回答者のうち1名を除いて「大いに感じられた」「おおむね感じられた」と答えており、教員の熱意は評価されていると言って良いでしょう。

③**講座内容の理解** 講座内容の理解についても、回答者のうち1名を除いて「よく理解できた」「おおむね理解できた」と答えており、カレッジ生にとっておおむね理解できる内容であったことが伺われます。



④**全体的満足度** カレッジ生の4分の1弱（23.8%）が「非常に満足している」、6割弱（57.1%）が「やや満足している」と答えており、あわせて8割強（81%）が満足しているようです。

### (3) カレッジ生にとっての大学

それでは、カレッジ生はそもそも何を求めて香川大学で学ぼうと思ったのでしょうか。

大学に対する期待として12の選択肢を設け、それぞれに得点を付けてもらったところ、「**知識を広げたり、理解を深めたりすること**」「**学ぶことや向上することの楽しさを味わうこと**」などの学習指向の選択肢、また「**人と知り合ったり、社会とのつながりをもつこと**」が上位にランキングされました。

ただし、同じ選択肢を用いて達成度を質問してみたところ、「知識を広げたり、理解を深めたりすること」において（期待－達成度）の差が最も大きいという結果が出ました。カレッジ生の高い学習志向に十分

出現回数	キーワード
21	知識
12	自分(自己/自分自身)
11	社会
9	得る
8	できる(出来る)
7	知的 学ぶ
6	交流(合流)
5	深める 身につける 専門 学習(学び)
4	思ふ 高める 挑戦する(チャレンジする/試す) 満たす 確認 好奇心 人生 友人(友・先輩・同輩・後輩/仲間/同胞) 勉強(勉学) 若者(若人/若い人/若い学生)
3	広げる 向上 探求 課題(問題) 基本(基礎) 技能(スキル)

答えられていないということになりますが、全15回の授業の全部ではなく部分参加であったため、一般の学生と同じようにもっと授業を受けたかったという思いが原因ではないかと推測されます。

ところで、「『私にとって大学とは～である。』の『～』を埋めて下さい。」という質問に対する回答を、キーワード分析してみたところ、左表のような出現回数となりました。「**知識**」を筆頭に、「**自分**」「**社会**」という言葉が続きます。学びに関する言葉が多いのですが、「**交流**」「**友人**」といったあたりにも目がひかれます。

#### (4) カレッジ生の目から見た香川大学～自由記述の分析を通して～

次に、自由記述欄の意見・感想をご紹介します。(読みやすさを考慮し多少訂正してあります。)

- ①学習の深まり 「この問題は法的にはどうなのかなあと思うことがあっても、以前は六法を開くのが煩わしかったが、**何はともあれ六法にすぐに手が出せるようになった。**」のような感想は、教員冥利につきるという思いがします。知識が深まったという意見は多かったのですが、一方で、「**参考図書などを紹介してくれるとありがたかった。**」「**これからもう少し深めて学びたいとき、どんな方法があるのか教えていただけるとうれしいです。**」のように、学習をより一層深めるためのアドバイスを求める声も見られました。
- ②レポート 「いざ書くとなると、書き方に悩みました。」という意見がありましたが、社会人に対しては書き方について多少丁寧に説明する必要があると思われます。また、レポート返却を求める声も相次ぎました。「提出したレポートを返さないのが今の方式のようですが、これはやはり粗末ながらも相当の時間を擁して書いた者にとっては、いかがなものかと考えます。」
- ③本学学生 教員に対しては概ね好意的な印象を持って下さったようですが、学生に対しては「遅刻してくる生徒が多くて戸惑いました。」「**学生は真摯に授業を受けていない。もっと授業を受ける態度を指摘すべきである。**」など、厳しい意見が相次ぎました。とはいえ、学生との交流を望む声は強く、「学生と同じ教室で学べることは『何かあるのではないか』と期待していたが、**最後まで学生との関係は希薄であったことが残念です。**」のような意見が頻出しました。一方、何らかの交流が授業中にあった場合、「若い人の考えがよく理解できました。**彼らを見直す機会になり、非常に有意義でした。**」との感想も見られました。
- ④環境・設備 学内美化についても多くの厳しい意見が出されました。「**教室が散らかっているのに学生さんたちは平気という姿にはショックを受けました。**」「**黒板を誰が消して新たに授業を受ける？**」
- ⑤その他 次のような“応援メッセージ”もありましたのでご紹介しておきましょう。「企業や一般社会に目を向けて開かれた大学になりつつあるのではないかと感じています。**地域に根ざした大学は、学びたい意欲のある者にとっては魅力のあることだと思います。**…特色ある豊かな大学を望んでいます。」

#### (5) アンケート結果を読む視点

少子化が進行する中、入学者の確保もさることながら、地域に「香川大学が必要だ」と思う層が厚くなることが求められています。そのためには、研究面で地域の企業・自治体との連携を進めることはもちろんですが、地域の人々が学ぶ場として大学を開いていくことも必要です。それは単に授業を公開すればよいというだけでなく、彼らに快く学んでもらうための様々な環境整備も含まれます。彼らの香川大学に対する評価を高めることに成功するならば、地域における香川大学のサポーター的役割を果たしてくれることになるでしょうし、反対に失敗すれば、カレッジ生のみならず地域における香川大学の評価を低めることになりかねません。それゆえ、かがわ県民カレッジ研究・実践講座で学んだカレッジ生の(正規課程に在籍していないという意味での第三者的な)目から見た香川大学の姿に対しては、大学全体で真摯に耳を傾ける必要があるでしょう。(文責:山本珠美)

※なお、本アンケート結果の詳細については、『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告第11号』掲載の「かがわ県民カレッジ研究・実践講座受講生アンケート調査報告～大学における社会人(成人)学習者の学びに関する一考察～」をご覧くださいと思います。

### 3. 第28回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会

2006年11月30日(木)、12月1日(金)の二日間、大分県の別府亀の井ホテルにて第28回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会が開催され、当センターからは総務グループの長尾光三が出席しました。

初日は大分大学長羽野忠氏の挨拶、文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課専門官吉岡富雄氏による記念講演の後、全体会協議として、本研究協議会の組織・活動のあり方や共同研究、交流の活発化についての提案がなされました。全体会の後は、「第1分科会:地方行政改革進行下における生涯学習・社会教育部局と生涯学習センターの連携」「第2分科会:生涯学習事業の意義再検討～公開講座は収益事業か?それとも社会貢献事業か?～」「第3分科会:専門職支援講座～小中高教員や地方自治体職員など専門職のキャリアアップ支援講座の開設について～」「第4分科会:大学開放事業における事務職員の業務と力量～職員の関与、広報戦略、事務組織のあり方、力量形成など～」の4つの分科会に分かれ(二日目も継続)、活発な討議が行われました。

## 4. 「公開講座の在り方に関する調査研究フォーラム」報告

2006年10月6日(金)、茨城大学にて「公開講座の在り方に関する調査研究フォーラム」(主催:文部科学省、放送大学、茨城大学)が開催され、専任教員山本珠美がパネリストとして出席し、香川大学の現状について報告しました。3年間にわたる本調査研究は今年が最終年度にあたり、「公開講座の質とその保証ー公開講座にかかる教員の業績評価をめぐるー」を全体テーマとして討議が行われました。公開講座担当教員に対する報酬は、アンケートに回答した全国の大学・短大の半数弱が一切の手当なし、半数強が謝金・給与へ上乗せという状況の中、受講料を研究費として配分するという本学のユニークな取組が注目を集めました。



なお、本フォーラムの詳細は、今年度末に放送大学から発行される『平成18年度文部科学省委託事業大学等開放推進事業報告書』に掲載される予定です。

## 5. 平成19年度公開講座募集

すでにメール等でお伝えしております通り、12月4日より来年度の公開講座の募集が始まっております。開講ご希望の方は、**平成19年1月22日(月)まで**に、配布いたしました計画書をセンター事務室までご提出下さい。

公開講座は香川大学の教育面での地域貢献事業です。講義だけでなく実習・実技なども積極的に取り入れた、魅力的な企画をお待ちしております。

🌿 申込先: センター事務室 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp  
🌿 問合せ先: センター専任教員 清國祐二 内線1272 kiyokuni@cc.kagawa-u.ac.jp

## 6. 『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第12号原稿募集

当センターでは毎年度『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』を発行しております。生涯学習を研究する本学教員、センターが主催する講座等を担当した本学教員、また、センターが主催する講座等を担当した学外講師で編集委員会が認めた者であれば、どなたでも投稿することができます。

すでにメールでお伝えしております通り、投稿ご希望の方は、所属、氏名、論文仮タイトルを**平成19年1月22日(月)まで**にセンター事務室または下記担当教員までご連絡下さい。

原稿締切は**平成19年2月28日(水)**です。多くの方のご投稿をお待ちしております。

(なお、投稿要領の改定により、本号から原稿の電子化を行い、センターHPに順次公開する予定です。)

🌿 申込先: センター事務室 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp  
🌿 問合せ先: センター専任教員 山本珠美 内線1271 yamamoto@cc.kagawa-u.ac.jp

### センター雑感

神奈川県出身の私は、香川大学へ赴任するまで、神奈川・東京・埼玉・静岡・山梨といったあたりをうろろろしていらしたので、四国には全くご縁がありませんでした(観光での訪問もなし)。ですから、香川県内に直接の知り合いなどいるはずもない、と思っていたら、あにはからんや、なんと大学時代のサークルの後輩がいました。それも学内に!! 4年くらい前まではお互いの動向を把握していたのですが、ここ数年は情報が途絶えており、また、同じ部局でない顔を合わすこともないので半年間気づかなかったのですが、前号のニューズレターを読んだ後輩が私の名前を発見し、10数年ぶりに再会を果たした、という次第です。ニューズレターを発行していなければ、いまだに気づいていなかったかもしれませぬ。今号にもそんなドラマが待っていないかな?(山本)